

# スミス・カレッジにおけるトランスジェンダー学生の受け入れ議論 —スミス副学長とシェイバー氏へのインタビューから—

Conversations and Discussions over Acceptance of Transgender Women  
at Smith College : Through an Interview with Ms. Smith and Ms. Shaver

オードリー・スミス \*, デブラ・シェイバー \*\*, 西尾亜希子 \*\*\*, 安東由則 \*\*\*\*

SMITH, Audrey, SHAVER, Debra, NISHIO, Akiko & ANDO, Yoshinori

安東 由則 (監訳・編集)

ANDO, Yoshinori (Trans. Supervisor & Ed.)

## 目次

1. アメリカにおける LGBT 学生の受入れに関する社会状況の変化
2. 学生受け入れ方針を変更するまでの話し合いの振り返り
3. Wong 出願以降のスミスにおける議論の経緯と詳細
4. 現在における状況
5. 議論を振り返ってみて

\* Vice President for Enrollment, Smith College (スミス大学・在学生担当副学長)

\*\* Dean of Admission, Smith College (スミス大学・入学担当部長)

\*\*\* 武庫川女子大学共通教育部・准教授、教育研究所・研究員

\*\*\*\* 武庫川女子大学文学部・教授、教育研究所・研究員



# スミス・カレッジにおけるトランスジェンダー学生の受け入れ議論 —スミス副学長とシェイバー氏へのインタビューから—

日時：2017 年 11 月 9 日（木）、11:00 ～ 12:00

場所：College Hall, Smith College, MA, U.S.A.

Interviewee：Ms. Audrey Smith (Vice President for Enrollment, Smith College)

オードリー・スミス（スミス大学・在学生担当副学長）

Ms. Debra Shaver (Dean of Admission, Smith College)

デブラ・シェイバー（スミス大学・入学担当部長）

Interviewer：安東由則、西尾亜希子（共に教育研究所研究員） 以下、“質問者”と記載<sup>1</sup>

まず、参加者 4 名が互いの自己紹介を行った後、本インタビューの録音と大学の雑誌への掲載の許可を得た。その後、予めメール添付で送付していた「インタビューのアウトライン」に基づき、今回のスミス・カレッジにおけるインタビュー調査の目的を説明した。説明の途中より、対象者側から本学や日本の LGBT やトランスジェンダーの学生の状況についての質問がなされ、それに答えながら、対象者へのインタビューへと展開していった。よって、インタビューの順序として、用意したインタビューガイド通りに展開してはならず、唐突に始まった形となっている。

## 1. アメリカにおける LGBT 学生の受入れに関する社会状況の変化

質問者（Transgender 学生の受入れに関する日本の新聞記事<sup>2</sup>を示しながら）この新聞は、LGBTI 問題についての記事を数多く掲載しているのですが、今や、すべてのメディアがこの問題に注目しています。この問題は日本において、もっと大きなものになっていくでしょう。

Audrey Smith（以下、Smith）大学側では、学生や卒業生から別の圧力を感じているのでしょうか？大学側の対応に関して、異なる意見が出されていますか？

質問者 私たちの大学にも、すでに LGBTI の学生は在学しているのですが、卒業生たちはその学生たちのことを少し不安に思っているかもしれません。現実には、高校生を含めて多くの LGBTI の学生がいますので、これらの学生たちを受け入れる必要があ

<sup>1</sup> 今回のインタビュー実施者は西尾と安東の二人であるが、インタビュー項目などは共同して作成したと、さらには読みやすさも考慮して、質問者に関しては二人を区別せず、“質問者”と統一して示す。

<sup>2</sup> The Asahi Shimbun “Transgender admissions in discussion at 5 women’s colleges.” June 29, 2017

るのですが、教授会の中で相互理解がほとんどない状態です。日本の大学全般にとっても非常に難しい問題であると言えます。

Debra Shaver（以下、Shaver） 5年から8年前のアメリカの状況と似ていますね。

Smith そうですね。日本の社会一般はどうでしょう？どの程度開放的なのでしょうか？

質問者 そのような彼/女らに対し、強い偏見をもっている人たちが多いのではないのでしょうか。例えば、年配の方々では、同性婚は許されるべきではないと思っている人が多いと思います。彼/女たちのことを本当によく理解している人たちは少数だと思いますね。

Smith そうですか。アメリカのスミス大学や他の女子大学では、過去25年から30年の間、レズビアン<sup>2</sup>の学生たちは自分のアイデンティティを公にすることに抵抗を感じませんでした。ほとんどの女子大学はその事実を受け入れていましたが、卒業生たちはイメージが悪くなることを懸念しており、（大学は卒業生たちと）この問題についてかなり議論を重ねました。15年ほど前でしょうか、本学には男性に性転換した学生がいました。つまり、女性として生まれ、女性として入学し、入学後に性転換をして男性としてのアイデンティティをもった学生です。大学では、このような学生たちについてどう対応するかについて積極的に議論しました。学生たちの間でも、（彼らに対する）代名詞の使用などについて異なる意見が出されていました。同時期、事務局には、女性に性転換した学生、つまり男性として生まれ、女性としてのアイデンティティを持つ学生の本学への入学に関する問い合わせが来るようになりました。15年前には、大学ではそのような学生と対話をする準備はできていなかったと言っているかと思います。

Shaver 15年前には、そうした問い合わせはほんの数件にすぎませんでした。私たちが性転換した学生たちについて本当の意味で議論を始めたのが、その時期なのです。そのきっかけは、男性に性転換した学生、つまり、女性として生まれ、スミス大学に来て、男性としてのアイデンティティを持った学生がいたことでした。

Smith 私の意見に賛成される方も反対される方もあるでしょうが、当時から本学ではかなりきちんと対応する準備ができており、男性に性転換した学生への対応経験もあったと私は思っています。もちろん困難ではありましたが、積極的にこのような対話に参加していました。ただ、実際のところ、“女性に性転換した学生”に関する対話については、積極的に取り組む準備はできていなかったように思います。大学ではしばしば起こることですが、学生たちは、教授会や事務局の大人たちよりも少し先を、卒業生よりはもっともっと先を行っており、学生たちがこの問題をより積極的に推し進めていったのです。

Shaver ご存知とは思いますが、2013年の入試で Calliope Wong<sup>3</sup> という学生の入学願書

が会議にかけられたことから（トランスジェンダー女性の入学に関する議論は）始まったんです。

**Smith** スミスにおいてはそうなのです。特に Shaver さんは当時、ちょうどその担当者<sup>4</sup>でしたから、彼女の名前は新聞記事に載りました。ですから、あなたがたは有名人に会っているんですよ。

この出来事によって、他の女子大学においても（トランスジェンダー女性の入学に関して）議論することが余儀なくされました。各女子大学はそれぞれ個別にこの問題に取り組みましたが、大学間で常に連絡を取り合っていました。

**質問者** 今から 15 年前、Wong さんの出来事より 10 年ほど前から議論はあったとの話がありましたが、男性に性転換した学生がいたから対話が始まったのでしょうか？

**Shaver** 本学に男性に性転換した学生が在籍していたからです。彼 / 女らの居場所があるのか、つまり女子大学に男性としてのアイデンティティをもつ者の居場所はあるのか、女子大学で男性としてのアイデンティティをもつということはどういうことなのかを考えざるを得なかったのです

このような対話を始めて、そこから導き出された方針とは、スミス大学がいったん女子学生を受け入れたならば、（男性に性転換しても）卒業させるということでした。スミスでは卒業生の性同一性を確認しません。学生はスミス大学に一旦入学して、必須単位を満たしていれば、スミスの、そしてスミス・コミュニティの一員としてサポートされるのです。問題は、そうした学生たちがサポートされていないと感じ、男性としてカミングアウトした場合、退学するよう求められるかもしれないと心配していたということです。それはスミス大学の意図するところではないということ、を、まず明確にしたかったのです。

**Smith** 私は、それがスミス大学や他の女子大学の非常に明確な倫理的立場であり、同時に法的立場でもあると思っています。教育修正法第 9 条 (Title IX of the Educational Amendment of 1972) で述べられているように、アメリカの大学では性別による差別が禁止されているのです。最初に法律として成立したときには、運動部や入学許可に関するものでしたが、現在は性的暴力の分野も対象となっています。私立大学の学部入学（女子大学への女子だけの入学）は明確に例外ですが、例外は入学の時だけです。

---

<sup>3</sup> 当時コネチカット州の高校生で、性転換手術は受けておらず、女性としての性自認であった。

<sup>4</sup> スミス大学としての回答は、性別が男性であるとの書類が 1 通あったので、受け付けられないというものであった。その受け付けられない旨の回答は、Dean of Admission であった Shaver 氏の名前で、Wong に二度送付された。その後、活動家組織の後押しもあって、TV、新聞 (*Huffpost*、*USA Today*、*abc News* 等) の多くのマスコミがすぐにこの件を取り上げた。そうしたマスコミの取材には Shaver 氏が中心となって対応することとなった。

Shaver 確かにそうです。アメリカの女子大学の中には、男性としてのアイデンティティを持つ学生の退学を推奨しているところもありますが、法的には問題になってはいません。

Smith そうですね。そういう大学は宗教色が強い、保守的なところが多いです。

Shaver アメリカの南部では北部と比べて宗教色が強く、より保守的です。しかし、大学構内において男性に性転換した学生についての対話を促進したのは、何度も申し上げますが、スミスの学生たちなのです。私たちのと言うか、少なくとも私の一番のお気に入り、高校生のためのキャンパス案内係になっている学生がいたのですが、4年生になったときに私のところにやってきて、“今、私は性転換中なんです。これから男性としてのアイデンティティを持つつもりなのですが、それでもキャンパス案内係を続けてもいいでしょうか”と言ってきたのです。“もちろん”と私は答えました。つまり、このような学生がいたということが、この問題について大学で話し合うきっかけになったということです。当時私たちが決定したことの一つは、もちろん大学生活を続けて構わない、しかし高校生たちがハウスに宿泊する場合、その付き添いをさせるわけにはいかないということでした。なぜなら、付き添いはすべて学生のみで、高校生たちと一泊した後、一緒に授業に出るからだといったことを話しました。これについても議論の余地があったのですが、この学生の場合、“男子学生として、女子高校生たちの付き添いになるには適切ではないと思います”と自分から言ってきたのです。

先ほども言ったように、もちろんこれは議論を引き起こす可能性のある問題です。現在、大学ではこのように実践されていますが、学生たちの間では引き続き議論が続けられています。

質問者 彼女は学生として4年間、ハウス（House）<sup>5</sup>の一員として住んでいたのです。

1つの部屋に他の学生と住むことは、問題ではなかったのですか？

Shaver 問題ではなかったと思います。新入学生はルームメイトと暮らしますが、ハウスの70%はシングルルームですから、大丈夫なのです。大学に入った1年目は、ルームメイトと住むということになっていて、入学審査の時点では許可した学生はすべて女性です。しかし、オリエンテーションの最初の日に、ルームメイトに紹介され、“これからは私のことを男性とみなしてください”、“私の名前はジェニファーではなくジャスティンです”と言ったとすると、女子大学に入学したのですからそれは驚きますよね。ご両親はもっとショックでしょう。双方の学生にとって状況をより快

---

<sup>5</sup> スミスの場合、ほとんどの学生がキャンパス内に暮らしているが、寮ではなく House と呼ばれる戸建てが35棟あり、それぞれが自治的に運営されていることが大きな特徴である。地域との House の間の垣根もほとんどなく、地域の中でともに暮らすという理念で House が作られた。

適なものにするよう、調整が必要な場合も出てきます。1 人が別の部屋に移るという場合もあります。

過去 5 年で、アメリカ社会はこの問題に対し劇的に変化しました。信じられないくらい。

Smith 本当に、変化が早いですね。

## 2. 学生受け入れ方針を変更するまでの話し合いの振り返り

Shaver スミスでは、女性に性転換した学生を自分で申告した性アイデンティティのみで受け入れるという新しい決定を発表するまでに、研究会（Admission Policy Study Group）を作り活動しました。どのくらいの期間でしたかね？

Smith 2014 年 11 月に招集され、2 週間に 1 度集まりました。そして、2015 年 5 月には教授会および理事会へ勧告書を提出したのです。

質問者 卒業生の反応はどのようなものでしたか？

Shaver あなたが予め送付された質問の中に、学生、教授会、事務局、卒業生対象の調査に対する回答はどのようなものだったかとありますが、実に様々な回答がありました。私たちの決定は、時間をかけ、注意深く考え、徹底的に分析し、熟考したうえでのものでした。私は卒業生から否定的な反応を予測していましたが、そうした回答はほとんどありませんでした<sup>6</sup>。

Smith 否定的な意見を出した者も中にはいましたが、ほとんどの反応は“もうそろそろ、（受け入れても）いい時期ではないか”、というものでした。

Shaver 私たちは二人とも驚いてしまったんです。

Smith アドバイスをできることがあるとすれば、スミス大学の視点（lens）とアメリカ社会の視点とがあるということです。私たちが成功したのは、とてもとても注意深く事を進めたからでしょう。大学の理事会も関わっていたのですが、彼らはこの件について非常に憂慮していました。学長は理事会と最後までずっと話し合いを続けました。そこでは学ぶべきことがたくさんあったのです。理事会との最後の話し合いで、理由はよく覚えていないのですが、Mona Sinha<sup>7</sup> の話が出てきたのです。彼女は学生生活担当の長である理事で、この全プロセスの最初に、“スミスが性転換女性を受け入れることは絶対にありません”と私に言ったのを覚えています。1 年後、このプロセスが終わったとき、彼女はこの決定を非常に誇りに思っており、“私ははっきりと

---

<sup>6</sup>大学 HP においても具体的な意見の割合などは公表されていないが、McCarney 学長へのインタビューを掲載したニューヨークタイムズの記事において、“Of the more than 1,800 emails the college received, ‘the overwhelming’ response was supportive of policy that would welcome transgender women” と、圧倒的に支持が多かったと回答している。

〈<https://www.nytimes.com/2015/05/05/opinion/transgender-students-at-womens-colleges.html>〉



(性転換女性が入学してよいと) 言ったのよ”と語り、私は“そう、あなたは確かに言いました”というような会話をしました。

#### (1) 決定プロセスにおける重要なポイント

Smith 私が重要だと思うのは、これ(意見の違い)が年齢に関係するということです。

私たちを強力に後押ししたのは若い人たちで、反対したのは年配の人たちでした。私たちは初期の段階から広告会社(public relations firm)と情報交換をしていました。そのコンサルタントが忠告してくれたのは、“何をしても決定が気に入らない人たちが必ずいる”ということでした。したがって“最も大事なことは、だれも疑問に思わないプロセスを作り上げることだ”というのです。なぜなら、このような対立する問題の結論には、必然的に賛成する人と反対する人がいるからです。結果がどうであれ、その議論のプロセスに納得することができれば、結果を受け入れることができる。このプロセスと一緒に辿ってこなかったら、世論がどこに向かっているかを見なかったら、学生や多数の教授たちがどんなに強い思いを抱いているかを知らなかったら、このプロセスと一緒に辿りミーティングでの進行状態を確認する機会がなかったら、などと考えればどうでなっていたでしょう。このことは本学の理事たちにも、そのまま当てはまることです。

私は研究会の共同委員長を務め、Debra (Shaver) もそのメンバーでした。教授会から選出されたもう一人の共同委員長(Daphne Lamothe)と私は、理事会で毎回、理事たちと話し合いを行いました。私たちが行った同窓生対象の調査も、この広告会社から勧められて行ったものです。同窓生は世界各地にいたので、他の地域では異なる意見があるだろうとは予測していました<sup>7</sup>。私たちは同窓生たちとの電話会議を4回行い、同窓会事務局の局長と研究会の代表として私が、そこに出席しました。様々な方たちが電話で参加し、質問ができるようにしていました。

このように(意見聴取を)実施したので、どのプロセスにおいても、皆が自分の意見をきちんと聞いてもらったと感じていたようです。ちょうどそれは、オリンピック選手の Caitlyn Jenner<sup>8</sup> が性転換して女性となった春でした。年配の卒業生たちにはとって、彼女は有名人の「彼」でした。この出来事は、社会的意識や社会的認識の点からみて、有利に働いたと思います。スミスに限ったことではなく、他の女子大学で

<sup>7</sup> スミスの卒業生で、当時の理事。マレーシアに設立された the Asian Women's Leadership University の創設者の一人であり、女性リーダーシップ教育に熱心に取り組んでいることでも知られている。〈[https://www.smith.edu/newspresident/search\\_committee.php](https://www.smith.edu/newspresident/search_committee.php)〉, 及び 〈<https://www8.gsb.columbia.edu/socialenterprise/about/advisory/sinha>〉

<sup>8</sup> スミスの卒業生である国土舘大学の砂田恵理加氏は、2014年11月7日付で、広く意見を聞くため、卒業生や大学関係者にメールが送付されてきたことを述べ、文面の一部を紹介されている。砂田(2017)「フェミニズムの歴史から考えるアメリカ女子大学の行方」『政経論叢』29(1), p.40.



もこのような対話が始まっていたという事実が、スミスの学生や他の女子大学をもさらに前進させたと思います。ミルズ (Mills)、マウント・ホリヨーク (Mount Holyoke)、ウェルズリー (Wellesley) が、スミスより前に声明を発表しました。マウント・ホリヨークでは、学長が少し強引に決定したようですが、事態が進行するにつれ、本学の理事会や同窓生たちが、スミスだけが他の大学と全く違った方向に進んでいるわけではないことを認識したと思います。自分たちだけが社会から外れ、違った方向に進んでいるのではないかという恐れがあったのかもしれませんが。先にも述べたように、学生たちの方が社会的変化にずっと早く対応していました。私にとっては（そうした変化を）受け入れることが非常に大変で、急速に学ばねばならないことも多く、皆が賛成したわけではありませんでしたが、皆、必死で取り組みました。

**Shaver** そうですね。長期にわたる緊張したプロセスでしたので、研究会では大きな信頼感が芽生えたと思います。皆、“ここが分からない”、“ここを理解しようと思う”、“この理解の手助けをしてほしい”、などと正直に言えたのです。これは本当に健全なことで、少なくとも私にとっては、（こうした会のあり方が）プロセスを豊かなものにしてくれました。実際、私たちは、最後には一つにまとまっていました。

**Smith** （結論に）全員が賛成したわけではありませんが、研究会においては女性に性転換した学生の入学許可に関して全員一致で賛成しました。しかし、男性に性転換した学生の場合はそうではありません。私たちは、敬意をもって、徹底的に、率直にこの問題に取り組みましたが、合意に達することはできませんでした。そこで教授会に対して、“合意に達することができませんでした。私たちの何人かはこういうふうに感じています、他の方はこのように思っているのです”と率直に伝えました。教授会では投票を行いました、やはり分裂していました。私は学長と定期的に会って話をしていましたが、“皆の意見が一致するかどうか分かりません”と申し上げました。学長は、“それが悪いことだとは限りませんよ”とおっしゃるので、“ご冗談でしょう。そうなれば本当にひどいことになります”と私は言いました。しかし、学長は正しかったのです。

最終的に、私たち（研究会）は勧告書を理事会に提出しました。（最終判断を下す）理事会の会議に私たちはだれも参加しませんでした。理事会は、これは私たち研究会の使命であると思っていたようですが、女子大学としての使命を確認する決定を行いました。この女子大学としての使命を果たすため、“私たちは男性に性転換した学生を受け入れることはできません”ということになりました。メンバーの何人かは

---

<sup>9</sup> モントリオールオリンピック（1976年）の10種競技で金メダルを獲得した William Bruce Jenner が、2015年4月、65歳で自身がトランスジェンダーであることを公表し、その後 Caitlyn Jenner に改名した。  
(<https://www.britannica.com/biography/Caitlyn-Jenner>)

この決定に失望したようですが、先にも申し上げた通り、研究会のメンバーはこのプロセスに納得し、自分たちの意見をきちんと聞いてもらったと感じていたのです。通常、研究会のメンバーは教授会には招かれませんが、教授会は教授以外のメンバーを教授会に招いたのです。そのことは、研究会の一部のメンバーにとっては非常に重要なことでした。

とにかく非常に興味深く、驚くような出来事でしたが、私はこの決定を誇りに思っています。最初に述べたアドバイスは、これはアメリカ社会に限って言えることなのかもしれませんが、もし結果が気に入らない人がいるのであれば、プロセスはしっかり保護される必要があります、その点で落ち度があってはいけないということです。本当にその通りだと思います。

## (2) Wong 事件に先立つスミスでのトランスジェンダーに関する議論

質問者 Calliope Wong の件が、このような物議を醸す決定の直接の引き金となったのですね。

Smith いや、彼女がというより、外部の活動家組織が彼女の件に興味を持ったということです。彼女は自分なりの理由があって行ったことなのでしょう。Calliope<sup>10</sup> といふかなり珍しい名前を選んだわけですから。彼女は GLAAD<sup>11</sup> などの組織から、メディアに対してどのように対応すればよいかという支援を受けていたと思います。そうして、より積極的な人格になっていったのでしょう。私たちも大学側の考えをどのように発表するか、メディアにどのように話をするか、という点を相談しました。まあ、本当にユニークな体験でしたね。

Shaver Wong の件がある意味では引き金になったかと思いますが、それまでに大学で議論を重ね、結果の主要点の 1 つは、このようなことがこれから起こるであろうということでした。私たちには、このようなことが起こるということが分かっていたのです。つまり、スミス大学には、男性として生まれ、女性としてのアイデンティティを持つようになった学生、または女性に性転換した学生が応募してくるだろうということです。

その時、私たちはどうすべきなのか？私たちはそのような件について議論しており、実際に事が起こりました。外部の活動組織が彼女を支援し大々的に展開したの

---

<sup>10</sup> ギリシャ神話に登場する女神の一人で、叙事詩を司るとされる。ギリシャ語で美声を意味する。  
〈<https://www.etymonline.com/search?q=calliope>〉

<sup>11</sup> Gay & Lesbian Alliance Against Defamation の略で、1985 年に LGBTQ の社会的な受け入れを加速させるべく設立され、彼 / 女らの支援や異議申し立てなどの活動を積極的に行っている 〈<https://www.glaad.org>〉。スミスの在学生組織である SmithQ & A も積極的な運動を繰り広げた。さらに、意見交換と署名を通してキャンペーンを繰り広げようとする組織 Change.org を通じて、多くの嘆願署名も集められた。

で、国際的に注目されたのです。

Smith 本学でも独自にこの件について議論しましたが、それに加えて 5 女子大学<sup>12</sup>の間でも、まとまった一つの組織であるかのように話し合いがもたれました。非常に大変な議論でしたが、そこから多くのことを学ぶことができました。

Shaver 興味深いことは、これらはすべて学生の入学応募時期に起こったということです。全国が注目し、社会が急速に変化していきましたので、私が心配したのは、この出来事が本学の入試における学生の歩留まり率にどのような影響を及ぼすかということでした。大学でのオープン・ハウスの期間中、キャンパスでは学生たちの抗議デモが続いていましたので、本学に応募して、入学を許可された学生自身または親が入学しないことを選択するかもしれない、ということが心配でした<sup>13</sup>。

Smith メディアを通しての嘆願書を集め、各種メディア、テレビ局の取材、学生のデモンストレーションなどがありましたからね。

質問者 それはもちろん、Wong が出願した 2013 年ではなく、翌年の 2014 年のことですね。

Shaver 2014 年です。あまり心配すべきではないのですが…。本学の（学生の）歩留まり率は高いですから<sup>14</sup>。しかし、何というか、私たちは衝撃を受けましたね。

### (3) 入学方針についての女子大学間での話し合いと、各校における自己決定

Smith 日本の女子大学でも、女子大同士と一緒に話し合いを持つこともあるとのことですが、そうした議論や情報を共有することにより、お互いをサポートできます。しかし、アメリカで最も困難なことは、異なる社会的集団や異なる人種集団には、異なる文化的な基準があるということなのです。スペルマン (Spelman) 大学<sup>15</sup> は女子大学で、もともと黒人学生のための大学ですが、今年、同じような過程を辿ることになり、私たちに相談をしに来られました。これも助けになりましたね。

Shaver しかし、アメリカ合衆国内で法的に実行不可能なことは、団体として決定を下すことができないということです。つまり、姉妹校 (sister colleges) がすべて、“では、皆で一致した決定を下すことにしましょう”とは言えないわけです。それは談

---

<sup>12</sup>Smith の他、Mount Holyoke, Wellesley, Barnard, Bryn Mawr。旧セブンシスターズのうち共学した Vassar と Harvard に吸収された Radcliffe を除いた 5 校であり、今日でも綿密に相互の連携を図っている。

<sup>13</sup>朝日新聞グローブ 177 号 (2016 年 2 月 21 日) に掲載された、スミス大学の McCarthy 学長へのインタビューの中で、9 年連続で志願者が増え、昨年 (2015 年と思われる) は 12% も志願者が増加したと述べており、心配していた志願者の減少は見られなかったようである。

<sup>14</sup>学生の歩留まり率 (Acceptance rate) を、手元にあった *U.S. News & World Report* 社の “Best Colleges” 2011ed., 2016ed., 2019ed. から拾うと、47% (2009)、42% (2014)、32% (2017) と上向いている。

<sup>15</sup>Spelman College はジョージア州アトランタにある 1881 年創設の黒人女性のためのリベラルアーツカレッジで、全米から学生が集まっている。学生数は約 2,100 名。(<<https://www.spelman.edu/>>)

合・共謀（collusion）と呼ばれており、法的には、私たちの間でそのような合意はできないのです。

質問者 この問題を話し合うために集まり、話し合いましたが、各自の方針はご自分でお決めくださいということですね。

<ここで、脚注 16 にある各女子大学の方針をまとめた Think Again Training の表<sup>16</sup>を示した>

Smith そうです。議論の中で、これをどのように説明するかは注意が必要です。アメリカの法的な文脈は、日本とは異なるかもしれませんね。皆で一緒に決定することができないのはまだいいのです。皆が同じ事柄に賛成すること自体が困難なのです。例えば、バーナード（Barnard）大学の決定はわずかに異なります。面白いですね。

高校の壁に貼ってあるこのグリッド（方眼）ですが、実は私たちもこれと非常に似通ったグリッドを理事会のために作成しました<sup>17</sup>。私たちが知りたいと思うこと、そしてその項目は変化し続けました。どんどん変化するため、常に最新情報を提示する必要があったのです。ここにスペルマン（Spelman）大学も追加できますね。

### 3. Wong 出願以降のスミスにおける議論の経緯と詳細

#### (1) Wong への出願書類不受理の回答

質問者 十分に意見を出し合い、公表しながら進めていくことが非常に大切なことは分かります。Calliope Wong 事件の場合、どのような経過を辿ったのかを具体的にお聞かせください。

Shaver それは、全プロセスにおいて非常に重要なことでした。私は入学担当責任者でしたから、Calliope Wong への手紙は私の名前で出されたので、私は世間の注目を浴びてしまいました<sup>18</sup>。決定通知は、入学担当責任者の決定ではありません。これは私よりももっと上の学長、そして理事会の決定なのです。

---

<sup>16</sup>5 大学の入学基準を比較した一覧表が、砂田恵理加（2017）「フェミニズムの歴史から考えるアメリカ女子大学の行方」『政経論集』（国土館大学）29(1), p.44 に掲載されている。原典は“Think Again Training” June 25, 2015 に掲載された ‘Comparison of Women’s Colleges’ Policies on Transgender Students’。現在はウェブ上にないが、National Coalition of Girls’ Schools <<https://www.ncgs.org/>> に pdf として保存されている。この表には先述 5 大学の他、カリフォルニア州の Mills とヴァージニア州の Hollins が記載されている。なお、本インタビューの前に掲載した「解説」（11 頁）に、その日本語訳を示したので参照のこと。

<sup>17</sup> スミスの HP には、この研究会の議論において使用された主たる資料とリンクアドレスが掲載されている。その中で、他の女子大学のポリシーも掲載している。Bryn Mawr(PA)、Mills(CA)、Mount Holyoke(MA)、Scripps(CA)、Simmons(MA)、Wellesley(MA) の 6 大学である。  
<<https://www.smith.edu/studygroup/materials.php>>

<sup>18</sup> 入学担当部長（Dean of Admission）の Debra Shaver 名で、不受理理由が書かれたメールを、2013 年 3 月 5 日付で Wong に送付。そのメールを Wong が Tumblr に投稿し、支援団体等から多くの反応があった。マスコミも大々的に取り上げ、対応した Shaver 氏の名前が表に出ることとなった。（脚注 4 と同じ）

Smith Calliope Wong は、理事会には連絡を取りませんでした。学長には連絡をしてきたので、私たちは大学の弁護士に相談しました。細心の注意を払ったのです。しかし私たちはもっと包括的な方針を検討している中で、それは Calliope Wong 一人の応募に対する対応であり、例外的なケースだったのです。もちろん彼女には、彼女が望んでいることが何であれ、私たちとの対話に関して公表する権利がありました。私たちは、学生たちの記録に関するプライバシー保護に準じているため、何も公表することができませんでした。

Shaver これは、法的な問題ですから。

Smith 法的であると同時に倫理的な問題ですね。あのような状況にあると、自分たちの側の話は共有（公表）できません。これは非常に難しい問題なのです。個人はどのようなことでも公表できますし、公表する内容を選択することもできます。個人がどうしても、公表された情報が包括的であろうと選択的であろうと、私たちは何も言えないのです。しかし、組織としての包括的な方針となると、私立大学であるスミスの入学審査は、組織として管理されており、教授会綱領（Faculty Code）もあって、責任が明確です。また、教授が担当する入学審査委員会（Board of Admission）があり、私は管理者（Administrator）、入学担当最高責任者（Chief Enrollment Officer）としてその委員会にかかわり、Debra も初年次授業委員会の責任者として私のような立場に入っています。委員会は入学審査方針に責任をもち、委員会は事務局や理事の承認対象となります。

## (2) 研究会（Admission Policy Study Group）の立ち上げメンバー

Smith 入学方針の研究会（Admission Policy Study Group）を立ち上げたとき、学長と理事会にこう言われました。“この方針の問題は本学の使命に関わるものです。前もってお断りしておきますが、入学審査委員会と教授会のアドバイスを基に、私たちが最終決定を下します。なぜなら、それが彼らの職務だからです。”入学審査委員会のメンバーの何人かが研究会にも参加していたので、彼らが理事会に報告をしていました。しかし、研究会では、大学の方針がより広範囲に及び、詳細に調整されたものになるよう、さらに努力すべきであると考えたので、入学審査委員会と並行してこの問題に取り組んだのです。入学審査委員会はその意見の異なる（split）勧告書を承認し、教授会も分裂した勧告書を承認しました。理事会はそれらの幅広い見解を採用したのです。誰も、これが進むべきプロセスであると知っていたからです。

質問者 研究会の中心となったのはどのような方でしたか。

Smith 研究会では、私と教授の2人が共同議長を務めました。この教授は女性およびジェンダー研究の Daphne Lamothe<sup>19</sup>（准教授）です。彼女は現在研究休暇中なので、



今日は会うことはできません。Lamotheさんは優れた方で、入学審査委員会の教授メンバーでもあります。私と彼女が共同議長になったのは、2人とも入学審査委員会にいたからです。その他には、数人の教授会メンバーがいました。そのうちの1人はCarrie Baker（准教授）で、彼女も女性およびジェンダー研究の教員（faculty）です。そして、アフリカ系アメリカ研究のKevin Quashie（教授）と社会学のNancy Whittier（教授）、地質学のAmy Rhodes（准教授）がいました。Kevinは途中で辞めましたね。

学生は3人おり、それぞれ異なる意見をもっていました。皆、自発的に研究会のメンバーになるわけですが、面接をして選ばれてメンバーになります。委員は学長による指名です<sup>20</sup>。同窓会組織の事務部長であったJennifer Chrislerもいました。彼女はスミスの同窓生で、スミスに来る前にはLGBT支援団体で働いていました。彼女は同窓会の見解を研究会に持ち込んでくれたのです。これは非常に大切なことでした。しかしそれ以上に、彼女は、この困難で複雑な問題の討論をする間、非常に豊かな専門的経験を私たちに提示し共有してくれたのです<sup>21</sup>。卒業生で、生涯教育担当の次長（Assistant Director）のToby Davisも研究会のメンバーで、メンバーであることを光栄に思い、非常に建設的で、積極的に発言するメンバーでした。

### (3) 研究会における議論と社会的流れ

**Smith** 最初のミーティング時に、研究会のメンバーの1人が、“ここには、性的不適合者がいませんね。これは問題だと思いますよ”と述べました。このことが議論され、私は学長のところへ戻り、“研究会ではこのような意見が出ました”と報告し、研究会ではそれについて話し合いました。実はスミスの卒業生で、男性としてのアイデンティティを持っている人がいるのです。彼は社会福祉の学校で働いており、研究会は彼をメンバーに迎えることが望ましいと考え、学長もそれに同意しました。

研究会の別のメンバーは、“この研究会に性不適合者がいると、腹を割った話し合

---

<sup>19</sup> 彼女は、African American, Afro-Caribbean and Black migration and transnational literatureを専門としており、大学が提供する“the Study of Women and Gender”といったプログラムにも参加している。2008年以出版された*Inventing the New Negro: Narrative, Culture, and Ethnography* (University of Pennsylvania Press)により、2009年にはWilliams Sanders Scarborough Prizeが授与された。  
〈<https://www.smith.edu/academics/faculty/daphne-lamothe>〉

<sup>20</sup> スミス大学HPのAdmission Policy Announcementには、研究会のメンバー13名が紹介されている。そのうち教員6名（教授2、准教授3、助教1）、事務方が4名（インタビュー対象の2名と同窓会関係副学長、生涯教育部次長）、学生3名である。Lamothe氏は先述したようにAfro-American Studies、Baker氏の専門はStudy of Women and Genderとなっている。

<sup>21</sup> Chrislerはスミスに着任する前、全国的な非営利組織 the Family Equality Councilで8年働き、事務局長を務めた。この組織において10万人以上のメンバーと一緒に、LGBTの親や子どもの平等を保全に尽力した。2018年3月からは、州立マサチューセッツ大学ダートマス校の協力推進担当副総長 Vice Chancellor for Advancement に就任した。〈<https://www.umassd.edu/news/2018/vcadvance2018.html>〉

いができないと思う”と言いました。この発言後が大変でしたね。アフリカ系アメリカ人のメンバーは、“それはつまり、アフリカ系アメリカ人がいると人種問題の話はできないという意味ですか？”と言返し、このメンバーは研究会を辞めてしまいました。もし、率直な話し合いができないと感じているとしたら問題ですね。この研究会では非常に有意義な話し合いができたと思っています。

質問者 研究会は、2014年11月から翌年の5月まで議論をしたとのことでした。では、どのくらいの頻度でミーティングは開かれましたか？

Smith だいたい隔週でした。時々、3週間に1度ということもあったと思います。

Shaver 時間はおよそ2時間程度ですが、4時間の時もありました。

Smith 別のミーティングもあって、共同議長のDaphne (Lamothe) と私は隔週で会っていました。本当に忙しかったです。非常に真剣な会であり、やるべきことがたくさんありました。皆が一体となったのはそのせいもあったと思います。学生たちの集まりで耳を傾け、事務方ではTobyやJenniferとのミーティングもありました。

Daphne と私は、メンバーの教授たちと会って話をしました。本当に良かったと思ったのは、女性とジェンダー研究の教授たちの意識が非常に高く、この問題についてよく知っていたことです。他のメンバーの中には、特に科学系の年配の教授などは、“この問題については何も知らない。こういうことについては考えたことがない”という人もいましたが、“私は自分のクラスの学生たちと会って、彼らにきちんと向き合わなくてはと思いました”という人、“発言するのはちょっと…。どのように考えたらよいのか分かりません”という感じの人など、様々な人に開かれた会議でした。既に考えを決めた人たちが参加しなかったという意味ではありません。私が言っている意味はお分かりになると思いますが、とにかく大変でした。

Shaver ミーティングの緊張感や長さは、宿題がたくさんあったということに関係すると思います。いろいろな資料を読む必要がありましたし、ビデオも見ました。女性およびジェンダー研究の教授も招待し、この問題についてどのように考えたらよいのかを示唆していただきました。

Smith 女性に性転換した学生の入学に対して、反対する学生たちと入学に賛成の学生たちがいましたね。

質問者 学長、理事長によって行われた教職員や学生、卒業生に対する調査は、ウェブや出版などのかたちで公表されないのですか？

Smith 内部閲覧のみ可能で、同窓会には公表されたと思います。研究会のウェブサイトにも抜粋があると思います<sup>22</sup>。誰でもアクセスできるよう公開にしたのは、研究会メンバーの名前、私たちが読んだ資料、私たちが招待した講演者の名前です。それからJennifer Boylanの名前もありました。彼女は女性に性転換した方でコルビー (Colby)



大学の教授でしたが、今はニューヨークタイムズに寄稿しています。彼女は自分の性転換体験について書いた本を出版しました<sup>22</sup>。彼女は本学で一般向けに公演を行い、その後で、研究会のメンバーと夕食を一緒にしました。

私たちはできるだけ隠し事をしないように努めましたが、研究会の個々のメンバーの意見は非公開です。会議室での討論も非公開で何を公表するかについてははっきりしていました。学生たちは、男性に性転換した学生の入学、ハウスでのルームメイトなどの問題についての賛否両面から、オープンに、ハッキリともの言う参加者であり、そんな彼女たちを私はとてもとても誇りに思っています。しかし、Dabra も言ったように、ここまでの信頼感を築き上げるには、時間も情熱も必要でした。

質問者 この問題をキャンパスで真っ先に議論することは怖く思われませんでしたか？

Smith この問題に対する学生たちの態度、そして全過程の終了時における学生たちの態度は、ここまで来るのに、時間がかかったという感じでした。一部の学生たちにしてみれば、私たちは先駆者でもなんでもなく、どちらかというと恐竜みたいなものでしょう。でも他の人たちにしてみれば、私たちは先を行きすぎているのです。Calliope Wong よりももっと前から、学生たちは大学内でひそかに対話をしながら、大学に圧力をかけていたと思うのです。Calliope Wong によって公に（そうした要求が）飛び出したといった感じでしょうか。次の年はかなり静かで、その次の年は集団の社会的圧力、そして学生たちの圧力が当大学を動かしたのだと思います。再度申し上げますが、私たちは先駆者ではありません。適切な時期に実行したのだと思います。

Shaver 他の女子大学も同時期に、この問題に取り組んでいましたね。

Smith そうです。私は Calliope Wong が女子大学における対話を加速したとは思いますが、それと同時に、アメリカ全土の中学・高校でもこの問題に取り組んでおり、そこには大きな圧力が存在するのです。応募の際、男性か女性かというのは、今まで非常に明確に定義されていました。中学・高校の方から、性転換者または別の性別の学生を受け入れてもらいたいという圧力がりましたが、これまで女子大学としては、“ちょっと待ってください。私たちは女性しか受け入れません。女性か男性という二極しかありません”と言っていました。すべての大学が性転換者を歓迎するようにとの圧力を感じていましたが、共学と女子大学では基本的に問題が異なるのです。大学

<sup>22</sup> 調査結果の抜粋があると言われたが、スミス HP 内の該当するページを探してみたところ、結果の概要を見つけることはできなかった。〈<https://www.smith.edu/studygroup/materials.php>〉

<sup>23</sup> 2015 年 4 月 30 日に公開での講演を行った。この講演はトランスジェンダーに関する研究会ではなく、Working Group on Campus Discourse が企画したものである。彼女は、*She's Not There: A Life in Two Genders* と、*Stuck in the Middle with You: A Memoir of Parenting in Three Genders* の 2 冊を 2013 年に出版している。〈<https://www.smith.edu/news/jennifer-finney-boylan-offers-presidential-colloquium>〉

の入学担当者たちはこの問題を幅広く捉え、声を大にして取り組んできました。そして、私たちはこのような特殊な状況にあって、この問題を取り扱わないわけにはいかなかったのです。

今、私たちは学生の性別を公にはしていません。研究会では、“私たちはこの大学に学生として迎え入れられた学生は誰でもしっかりとサポートされる必要がある”ことを明確に述べました。私たちが勧告の一部として決定したのは、スミスにいる性転換者を確実に全面サポートするということ、これは学部長、学生課が責任をもって執り行うこと、そしてカウンセリングサービスを提供するということです。もう一度言いますが、性別に関する情報は公開しないということです。学生は自分で選択することができます。

#### 4. 現在における状況

質問者 性転換した学生が応募する場合、性転換者であることを示す書類が必要ですか？

Shaver いいえ、必要なのは学生自身が女性としてのアイデンティティを持っていると、述べるだけです。彼らの誕生時の性別は関係ありません。

質問者 性別を示す書類がなくても応募できるのですか？

Smith できます。まず、一般的な応募書類を使用します。これは Common Application（共通応募書類）と言われているものです。または Coalition（連立）と呼ばれる別の用紙を使用することもあります。どちらの応募書類も学生が応募する複数の学校間で共有されます。したがって、共学を含めた応募書類には、性別を明記する必要があります。

質問者 スミス大学に在学中に男性に性転換した学生がいたということでしたが、今もそうした学生たちがいますね。外科的手術を受けたということですか？

Shaver いや、それは分かりません。女性への性転換、または男性への性転換というのは、アイデンティティの問題なのです。外科手術、性転換手術を受ける必要はないですし、すべての性転換者が性転換手術を受けるとは限りません。

Smith 一般的には、そのアイデンティティでしばらく過ごしてみる期間を設けることが必要です。転換の準備として、まずホルモン治療を受けるのが一般的だと思います。外科手術を受ける、受けないは別です。ホルモン治療を受け、そのあと肉体的な変化を経験すると、精神的にも変化を経験することになります。男の子となって思春期を通過するようなもので、行動に問題が生じる可能性もあります。

Shaver こうした学生にはサポートが必要です。

Smith 明日は、学生部長（Dean of Students）の Julianne Ohotnicky とお会いになりますね。彼女の下で働いている人たちは、大学内の誰よりも進んでいると思います。彼

女の仕事は、学生たちのニーズが満たされているかどうかを確認することです。彼女は研究会のメンバーではありませんでしたが、研究会のプロセスを理解しており、スタッフたちは特にこの問題に真剣に取り組んでいます。

質問者 彼女たちも、性転換者の支援を行っているのですね。

Smith そうです。彼女は、ハウスにおけるあらゆる学生たちの生活を管理する担当者です。健康保健、カウンセリング、精神衛生などを管理します。学生たちの様々なニーズがなだれ込んでくる場所ですね。彼女は学生たちの行動規範に対処し、適切な行動をとらない学生たちを管理します。彼女は、教室外の学生の生活をすべて見ているわけですから、この問題に誰よりも深く関わっていると思います。

質問者 このような変化を受けて、現在、学生のトランスジェンダーへの理解を図るため特別な措置をしていますか？例えば、トランスジェンダーや性転換に関する授業を設ける、あるいはそうした授業を必修とするなどという対策をとっておられますか？

Smith いいえ、女性とジェンダー研究についてはこの課題を扱うクラスがありますが、必須ではありません。オプションです。

Shaver キャンパスには、性転換者だと知られていない学生もいる可能性があります。なぜなら、私たちは誰がそうなのかを識別しませんし、彼女たちは応募の段階において、女性としてのアイデンティティを持っているからです。

質問者 彼/女らは通常、大学構内に他の学生と一緒に住んでいるわけですね。例えば、友達になると自動的にわかるということがあると思いますが。

Shaver 分かる場合と分からない場合がありますね。

Smith その人がどこまで他者に話すかによります。しかし、それは個人の自由選択です。公になった記事もありました。ウェルズリー大学では、女性に性転換した学生が入学しました。今年の秋入学した学生は、積極的にその事実について発言していました<sup>24</sup>。スミス大学にも、自分のアイデンティティについて公表している学生がいましたが、メディアに対してではなく、このスミスのコミュニティに対して公表していましたね。

## 5. 議論を振り返ってみて

質問者 今、振り返ってみてどんな感想をお持ちですか。少し気楽な感じでしょうね。

Smith 確かにその8ヵ月間は非常に大変でしたが、私はその経験に感謝しているんで

---

<sup>24</sup> ボストンの報道機関 WBUR は、性転換で女性となった Ninotska Love さん（28才）が、2017年9月、ウェルズリーに入学したことを伝えている。147年に及ぶ Wellesley の歴史の中で、性転換者の入学は初めてであると報道し、彼女が寮に引っ越している写真を掲載している。〈<https://www.wbur.org/edify/2017/09/05/ninotska-love-transgender-woman-wellesley>〉

す。取るに足りない問題を抱えているとは思ったことはありません。

Shaver そうですね。誰もこの問題に関する質問はしてきません。この問題に賛成しない人からの連絡や問い合わせはありませんが、そういう人たちは本学には応募しないのでしょう。噂話以外、何も耳に入ってきません。何か聞こえてくるとしたら、無駄話です。それは社会の変化によるものだと思います。

Smith 日本の社会はまた異なるのですが、あなたが経験しているプロセスが社会の変化に沿っているなら、世代間の差であるということを頭に入れば、大丈夫だと思います。私たちは適切なプロセスを適切な時期に辿ることができたことを幸運だったと思っています。

Shaver 適切な時期でしたね。

Smith うーん、分かりません。でも、学長や何人かの理事は、強い信念を持っていて、もっと迅速に事を進めたいと思っていたようです。理事長は迅速さには躊躇しておられ、“いや、もう少し時間をかけるべきです”とおっしゃっていましたが、結果的には良かったと思っています。あなた方の大学の運営形態はよく知らないのですが、私たちにとって最も大変だったのは、理事会を教育して私たちと一緒に歩んでもらうことでした。理事会は大学の運営機関で、金銭面での最大の支援者です。彼/女らは同窓会のメンバーよりも少し年配で、保守的な傾向にありますが、結果的に彼/女らは動きました。理事会を動かすのは非常に大変だったのですが、理事長は素晴らしかったです。

質問者 日本の多くの女子大学は、男性学長によって運営されており、ある意味伝統的で保守的です。あなたが言われたように、教授会や学生たちがもっとこの課題について議論を重ね、若い学生や卒業生からの説得力のある方針を経営側に提示すれば、日本の女子大も変わると思われますか。

Smith そうです。別の角度から話ができる卒業生がいる場合、役に立ちます。社会的な考え方や態度がいかに早く変化することか。このように迅速な変化は見たことはありません。これは本当に驚きでした。

Shaver 強くないとだめですね。

Smith あなた方はせっかくここに来てくださったのだし、私たちのことも知っているのでも、もしあなたの大学で、このようなプロセスを辿る場合には、ご遠慮なくメールでご連絡ください。

質問者 お忙しい所、時間をおつくりいただき、詳細に語っていただきまして本当にありがとうございました。この問題は日本の女子大学でも議論され始めたものであり、今後の議論に大いに役立つものと思います。

- ※ 1 本誌掲載インタビューについては、録音を書き起こした英語原稿を作成したのち、翻訳業者が粗訳を行い、安東が録音テープと英語原稿から翻訳原稿の確認と修正をするとともに、全体の編集を行った。基本的にはインタビューの全訳であるが、一部聞き取れていなかった内容もあり、それらは削除されている。プライバシーには配慮して伏せた者もあるが、HPに掲載されている者についてはそのまま表記している。前後のつながりが分かりにくい箇所については、話の順序を入れ替えた箇所が、ごく一部ある。
- ※ 2 脚注に記載してあるインターネットアドレスについては、全て 2019 年 2 月 27 日～ 28 日時点において掲載されていることを確認した。

付記 本研究は、2015-2018 年度・科学研究費助成事業（基盤研究 C）「女子大学の存立意義とサバイバルストラテジー：日本・アメリカ・韓国の国際比較」（課題番号 15K04327）による研究成果の一部である。（なお、本研究は、2019 年度まで延長する予定である。）